



【三光幼稚園】
TEL：0952-31-0753
【さんこう児童クラブ携帯】
TEL：090-7430-1312

「自分で考えて行動する」

上記が、さんこう児童クラブの2月の目標です。この時期、幼稚園の年長児も3学期の仕上げとして、自分で考えて行動する習慣づけをしています。とはいえ、まだまだ自分の気持ちを調整するのが難しい場面も多々あるのですが、その時の強い味方は友達です。大好きな先生と友達に囲まれて、1年生になる準備を着々と進めています。

コロナ禍前は、地域の連携校の小学1年生と年長児が交流する機会が数回あり、広い校舎や教室を案内してもらいながら、1年生から聞く小学校での生活に期待を膨らませていました。今、送り出す側は、主体的に聞いたり、相手の意見も聞いたり、そして考えたりして、深い学びが得られるよう、練習をしているところです。

新1年生が、遅くなった新2年生にたくさん助けてもらいながら、成長していくのを見るのが楽しみです。

☆ 2月のおたのしみ ☆

- バレンタイン製作
- 戸外活動
- (ドッジボール・えいご鬼・長縄 等)

2月の学童児童数

	1月末 在籍数	2月 新規人数	2月初日 人数
1年生	11	0	11
2年生	1	0	1
3年生	0	0	0
計	12	0	12

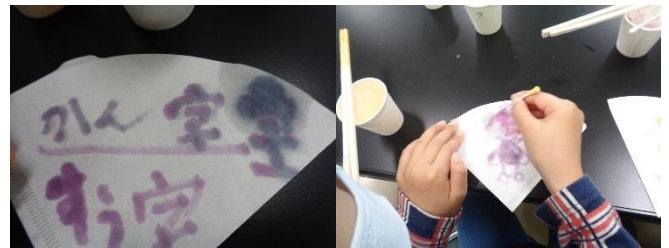
児童の様子

あっという間に冬休みが過ぎていきました。厳しい寒さが続きますが、子どもたちは毎日元気に活動しています(^_^)

冬休みは凧あげや書き初めなどの活動を行い楽しく過ごしました♪その中でも1月6日に学生さんとの活動に参加したことが子どもたちの中で印象に残っているようです。学生さんから「実験をするよ!」とだけ聞かされていた子どもたちは、「どんな実験をするんだろう?」と胸を躍らせながら活動場所へ移動していました☆その場所は、理科室のような所で少し緊張している様子でした。実験の内容は最初に花びら(パンジー)、紫キャベツ、ブルーベリー、みかんの中から2つずつ選んで色水を作り、コーヒーフィルターに自由に絵を描きます。その絵にクエン酸水と重曹水を掛けると色はどのようなもの。活動が始まると、緊張していた子どもたちの顔も少しずつ和らぎ、学生さんとの会話を楽しみながら実験に取り組んでいました♪さて、みんなの描いた絵の色は変わったのでしょうか?? ~子どもたちもびっくりの結果でした!♪~



上手に色水ができるかな?



重曹水をたらしたら色が青っぽくなったよ!
クエン酸水は桃色になった!

☆ちなみに重曹水とクエン酸水両方をたらすと色が消えました\(@o@)/!

◇ 2月の目標 ◇

「自分で考えて行動する」

3学期になると、進級の為の準備が少しずつ行われていく事と思います。児童クラブの子どもたちももうすぐ進級するという期待をもって過ごしているようです(^_^)。学年が1つあがる前に自分が今何をすべきか、友達への関わり方など生活の様々な面においてできるだけ自分で考えて行動できるようになってほしいと思っています。

2月は自分で考えながら活動したり、友達と遊ぶことができるように関わっていきたいと思います。

遊戯療法は「遊び」を通して、子どもの成長、発達を促すことが出来る療法で、保育現場では最も有効な療法と言えます。子どもの世界は、「遊び」の宝庫であり、遊びの中で展開される表現は、子どもの「こころの表現」とも捉えられます。子どもは、砂遊びやお絵描き、ごっこ遊びなど心地よい体験を通して内に沸き起こるイメージを膨らませながら遊んでいるとも思われます。そういう意味において、乳幼児のこころの健康を考えると、子どもの主体性を大切にしながら、子どもの遊びが「テクニックの習得」にならないような配慮が必要だと思われます。子どもは、身近な大人との心地よい体験の積み重ねをしながら成長していきます。しかし、ここ数年、子ども達のこころの危機が叫ばれるようになり、嘔みつきや泣き叫んだりなど気になる行動が目立ち、特別なニーズをもった子ども達の環境や表現をより適切なものにする工夫も必要になっています。すなわち、子ども達の気になる行動は、心地よく生きられないという大人へのメッセージでもあると捉えられます。

ここでは、保育の中で特別なニーズを持った子どもたちへの支援にもつながるのではないかと考え、保育園での遊戯療法的関わりについてお話しします。

① 子どもとかかわる時の大切な視点

基本的に保育は、集団を中心に展開されます。しかし、集団の中でも遊戯療法的要素を持ったかかわりをする事により、本来子どもが持っている豊かな世界に触れ成長を促進することができると思います。

遊戯療法は、いうまでもなく身体と創造力を使って行われるもので、セラピストは子どものイメージの世界を共有しながら生きることが必要になります。身体と創造力を使うという視点から、10年ほど前西九州大学において「本気で遊ぶ」ことをテーマに遊戯療法学会地区研修会を開催しました。箱庭療法やコラージュ療法のように体験を通して研修を深めることはできないかと考え、野外で創造力を耕すワークショップを行いました。地面に腹ばいになり、自分の指先ほどの高さから草むら歩き体験です。今まで上から見下ろしてきた世界と違いアリと一緒に歩いたり、葉っぱがとてつもなく大きく見えたり、石ころが大きな障害物になったりなど視点を変えるだけで見える世界が変わりイメージが広がる体験でした。子どもは、寝転んだり、四つん這いになったり、しゃがんだりなど独特の身体感覚を伴いながら遊びを展開していきます。アリと一緒に歩いたように、子どもの視点と同じ位置にいる姿勢が、身体を通して遊びの世界を共有し、子どもとの一体感(子どもと混じり合う体験)を感じることも遊戯療法的関わりの一つです。

② 「安心・安全」の基地作り

乳幼児の心理的支援は、安心できる場と安心できる人の提供であり、子どもが望んでいるのは「自分と楽しく遊んでくれる人」であると考えます。子どもたちが、心地よく生きられる空間は、大人も心地よい空間です。このような、心地よい空間の中での「本気で遊ぶ」体験が遊戯療法の基盤にあると思われます。

本来、子どもの遊びは子どもの自主性や主体性を尊重し、大人は子ども自らがその気になって遊ぶことを引き出していく役割があります。引き出す要素には、子どもを大切にすることがあげられます。子どもを否定したり無視したりせず遊ぶことの楽しさを体験していくとき、「安心・安全」な守りの中で、子どものこころが開放され、創造性が育まれていくと思います。子どもの心理的支援を考えると、ことばによるコミュニケーションが十分にとれない子ども達に、遊びを通して自己表現の機会を与え、表現することの楽しさを体験することは重要です。

③ 保育現場におけるコラージュ療法(遊びの中での自己表現)

現在、私は保育の中で「遊び」を主体に子どものこころの開放やこころの表現に着目し、コラージュ表現を用いた遊戯療法的関わりを行っています。

コラージュ療法は、さまざまな形で臨床現場に導入されていますが、材料の用意から作成の進め方など自由度は高く、実践者が工夫しながら行える療法の一つです。幼児の場合は、あらかじめ、雑誌やパンフレットから絵や写真、文字など等の材料を集めて切り抜き、持ち運びしやすい箱の中に入れておくコラージュ・ボックス法を用いています。この方法だと、子ども達に応じて切り抜きの内容を調整することができ、はさみ使用が困難な子ども達にも可能です。切り抜く材料は、動物、植物、食べ物、車など出来るだけいろんな領域から選び複数の箱に分類し入れておくとう便利です。

保育園では、個別で20分ほどでコラージュを制作しお話をする時間を設けています。4歳児男児のコラージュ制作後のお話では、「動物たちを食べるお話」で「くまさんが木を食べて、ゾウさんが虫を食べて・・・最後は猫がみている」とお話をしてくれます。ちょうど4歳児は「安全」基地から探索が始まり競争の世界に入っていきます。取ったり取られたりしながらたくましく成長していく時期ですが、コラージュ表現の中に見事にこころの表現がされています。このように、遊びの中で展開することは、気持ちの開放や自己表現の機会を与え、心地よい体験になると思われます。そういう意味で「あそび」は子どものこころを開く有効な方法です。表現あそびなどを丁寧にあつかっていくと、そこには、豊かな子どもの世界との出会いがあります。コラージュ表現も子どものこころを豊かにする技法であると感じます。最後に、表現活動は「テクニックの習得」ではなく、子どものこころの表現とそれをきちんと受け取ることを基盤に理解してほしいと思います。